

# 白峰村大道谷地区における出作り分布の変遷について

岩 田 憲 二 石川県白山自然保護センター

## ON THE CHANGES OF THE DISTRIBUTION OF DEZUKURI IN THE OHMICHIDANI DISTRICT, SHIRAMINE-MURA

Kenji IWATA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

### はじめに

石川県白峰村は焼畑・出作りといった、平野部では見られない山村特有の生活文化の一中心地として知られ、山村研究の対象にもしばしばなってきた。田中・幸田（1927）、加藤（1935）は当地域の出作りを詳細に研究し、出作りの起源を母村の人口増加と耕地不足によるものとした。戦後は、佐々木（1972）が社会経済的視点から出作りの発生を説明し、千葉（1983）、橋（1984）は焼畑を伴う農耕文

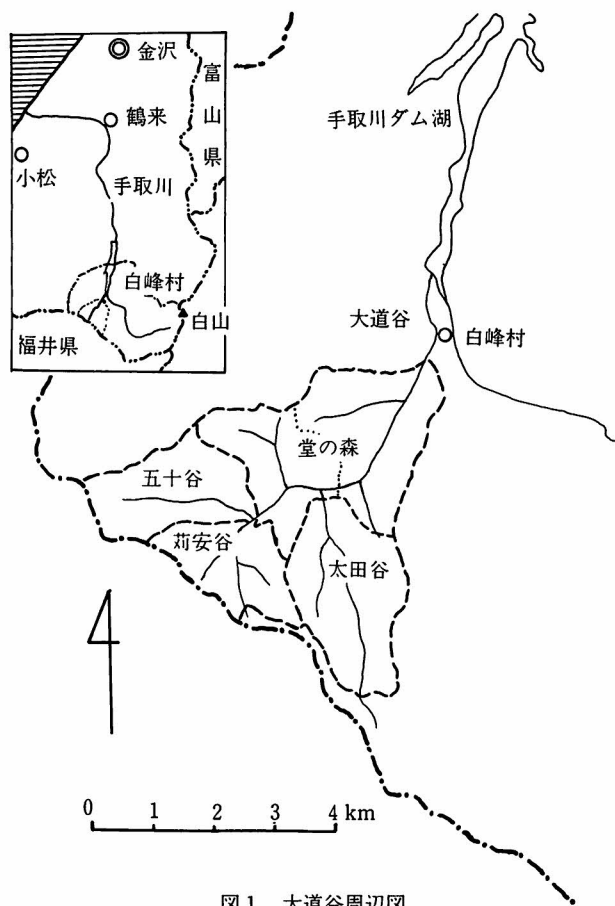


図1 大道谷周辺図

化の伝播という観点から、白峰村の出作りの起源を説明した。

しかしながら、出作りの分布については今のところ詳細な研究はされていない。ここでは、白峰村大道谷における明治以後の出作りの分布、居住地の変遷、および土地所有等について紹介し、出作りを考察するための基礎資料を作成した。調査は大道谷に長年住んでいた何人かの古老に対する聞き取りを中心に行ない、出作りの位置を五千分の一森林基本図に記入し、分布図を作成した。本論では夏期のみ大道谷に居住する季節出作りのほかに、通年山中にすむ永住者も便宜上出作りに分類し調査の対象とした。なお、出作り分布図は明治末頃から現在までに居住したことのある者を示してある。調査に際しては白峰村役場および、数多くの大道谷居住者の方々にお世話になり、特に山口甚之助・山口甚太郎・中山喜四松・中山与四喜各氏には貴重な資料・情報を提供していただいた。また、橋札吉氏（石川県立歴史博物館）には現地調査の際に有益な指導・助言をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

### 出作りの分布

大道谷の出作りの分布調査は、かつての居住者への聞き取りにより行った。大道谷の現居住者は3戸（すべて堂の森）で、他に夏期のみ出作りが3戸、一時滞在者が3戸（別荘等）あるが、今でも区長をおき一つの区として機能している。かつては、大道谷区の下に堂の森・太田谷・五十谷・荊安谷といったより小さな下部組織があり、各種行事はそれぞれの組単位で行なわれた。堂の森はさらに上堂の森・下堂の森に分かれていたが、組としては一つであった。従って、出作りの分布も4つの組単位に分類して調査した(図2～図5)。調査の結果、名前(屋号)・住居の位置・居住形態等がわかったのは、堂の森で50戸、太田谷で33戸、五十谷で20戸、荊安谷で20戸の合計123戸である。しかし、この中には住居移動(後述)による重複がいくつもあり、分家・養子・断絶といった家系の変遷もあったので、実際の戸数はもっと少なく、大道谷の最盛期(明治末から昭和初期)には約80戸の家があった。

大道谷の出作りの特徴は、その大部分が通年居住者という点で、堂の森では50戸中41戸、太田谷は33戸中30戸、五十谷は20戸全部、荊安谷は20戸中19戸が山中に通年居住していた。つまり、ほとんどの家が冬の間も大道谷の地で生活していたわけで、同じ白峰村でも季節出作りが大部分を占めていた桑島・下田原地区とは好対照といえる。各出作りは、大道谷地区の中心地で神社や分校が分布した堂の森にある程度居住者が固まっていただけで、あとは数十～数百m間隔で分布し、橘(1984)の『焼畑山住散居村集落』の様相を呈していた。

各出作り住居は、山地斜面の平坦地で水の便のよい沢の近くにあり、雪崩の危険性の少ない場所が選ばれた。出作り住居の標高は大体600m～900mの間にあり、いわゆるブナ帯の下部に立地した。これまで何度も指摘されたが、ブナ帯は野生食用資源が豊富なために、相応の生活様式と生産手段を保持していれば生活可能な場所であった(岩田, 1985)。それが出作り生活であり、またヒエ作を中心とする焼畑農業であった。これらの生活文化を背景に、前記の散居村的景観が大道谷で見られたのである。

### 住居の変遷(大道谷内部での転居)

大道谷の出作りを調査してわかったことの一つは、予想以上に住居の移動があったことである。この場合の移動とは大道谷内部での転居のみを対象としたが、下記のとおり18例を確認できた。転居前よりも交通等の立地条件が良い出作り地へ移るのが通常のパターンであり、誰かが転居するとすぐその場所に移ることが多かった。これは、大道谷のような多雪地では空家をそのままほおっておくと、

すぐに壊れてしまうためでもあったと考えられる。総じていえることは、一つの土地にそれほど縛られることなく割合気軽に住居を移り、しかもそれが実利的発想に起因することが多かった。

別の見方をすれば、焼畑・製炭・養蚕といった生産技術さえしっかり保持していれば、大道谷のように広大な土地利用空間のある山村では転居後も充分生活が可能であったことを示している。仮にそれが請作であっても、大道谷では金納よりも”年貢払い”が普通であったので、地主に対する負担はそれほど大きくなかったそうである。この年貢は通常、地主が所有する山林の手入れ（下草刈りや枝打ち）などの人夫労働とヒエ・アワなどの物納が中心であった。また、地主と小作の関係は契約主義的色彩が薄く、より人間的・家族的な結びつきが強かった。以上の背景があったから、比較的容易に転居することが可能であったし、また、通年居住を可能とした要因となった。

### 「大道谷における転居例」

#### (1) 堂の森

a：堂の森 (31)→堂の森 (19)→堂の森(18)

b：堂の森 (40)→堂の森 (40)

c：堂の森 (33) →太田谷 (6)

d：堂の森 (50) →五十谷 (5)→苺安谷(2)

e：堂の森 (23)→堂の森 (23)

#### (2) 太田谷

f：太田谷 (8)→堂の森 (46)

g：太田谷 (9)→堂の森 (27)

h：太田谷 (9)→堂の森 (45)；gが堂の森へ出たあとにhが入った。

i：太田谷 (19)→堂の森 (30)

j：太田谷 (21) →堂の森 (20)

k：太田谷 (24) →太田谷 (3)

l：太田谷 (30) →堂の森 (16)

#### (3) 五十谷

m：五十谷 (8)→堂の森 (41)

n：五十谷 (12) →五十谷 (14) →堂の森 (29)

o：五十谷 (16) →五十谷 (1)

p：五十谷 (17) →五十谷 (11)

#### (4) 苺安谷

q：苺安谷 (5)→苺安谷 (1)

r：苺安谷 (17) →堂の森 (28)

### 転出先 (大道谷から外部へ)

大道谷には前述のとおり、最盛期には約80戸の居住者がいた。これは戦前の明治・大正にかけての頃のこと、昭和30年頃には37戸、昭和40年頃（三八豪雪の後）には12戸に減り、これが現在では居住者6戸（定住者と出作り）になった。昭和30年代以後の居住者の減少（37→6）については、燃料革命（薪炭から灯油・ガスへの家庭エネルギー源の変化）による製炭業の崩壊と、それに続く過疎の進

行によるものである。それでは、大道谷の旧居住者はどこへ転出したのであろうか。

表1 大道谷居住者の転出先

	白峰本村	福井県(勝山)	金沢方面	その他	合計
堂の森	8	21 (17)	6	10	45
太田谷	9	12 (11)	5	6	32
五十谷	5	6 (6)	1	7	19
苺安谷	2	9 (8)	2	6	19
合計	24	48 (42)	14	29	115

大道谷の現居住者3戸と転居による重複者を除く。

聞き取り調査の結果をまとめると表のようになった。これは明治から現在まで大道谷に居住したことのある人を対象に、聞き取りによって転出先を確認した。この転出先は最終的な落ち着き先を示したもので、白峰本村(旧牛首地区)及び福井県(特に勝山市)が多い。本村が多いのは当然であるが、県外の勝山への転出者が最も多かったのは意外であった。大道谷と勝山が地理的に近いということもその要因の一つであるが、千葉(1983)の指摘する、数百年も続いてきたであろう白峰と勝山との地縁・血縁関係的な結びつきの強さというものが、最大の要因と考えるべきである。また、そうした風土の中で形成された越前(今でも地元の古老は勝山・大野といった福井方面をこう呼ぶ)に対する親近感というものも、転居先を選ぶ際に大きく影響したのではなかろうか。

#### ま と め

昭和30年代までは、現在では想像もつかないくらい多くの人が山村で生活していた。当地域の山村の直接的な生活基盤は、商品生産(製炭・養蚕など)と自給生産(焼畑・常畑での農耕など)を巧みに組み合わせた複合生産形態にあった。しかし、より深く考えるならば、そうした生産形態をうまく機能させるだけの生活文化および農耕文化があって初めて生活が成立したのである。大道谷のような多雪地で通年居住が可能だったのは、それら“文化”が存在していたためである。当然、どこか他所から文化が伝播してきたことが考えられる。

明治末以後の転出先は勝山を中心とする福井方面への転出者が多かったという調査結果は、かつて越前から大道谷方面に向かって人の移動(つまり文化の伝播)があったことを示す要因といえるのではないか。そして、それこそが大道谷における通年居住(つまり従来いわれていた永久出作り)の起源と思われるのである。既に千葉(1983)は、江戸後期の出作り地における死亡者数の変化から、越前→白峰という人口移動があったことを示唆し、白峰村南部における出作りの起源を推論している。従来唱えられていた、本村の人口増加と耕地不足による出作り起源説はもう否定してもよいのではないかと結論づけたい。

文 献

- 千葉徳爾 (1983) いわゆる『出作り耕作』への疑問, はくさん, 第11巻1号, p.10-12.  
岩田憲二 (1985) 出作り地の食生活——白山麓の場合——石川県白山自然保護センター研究報告, 第12集, p.59-66.  
加藤助参 (1935) 白山山麓における出作の研究, 京大経済論集, p.245-351.  
佐々木高明 (1972) 日本の焼畑, 古今書院.  
橘礼吉 (1984) いわゆる『焼畑・出作り』への視点, はくさん, 第12巻2号, p.8-11.  
田中啓爾・幸田清喜 (1927) 白山山麓に於ける出作地滞 (一), 地理学評論, 第3巻4号, p.281-298.  
——・—— (1927) 同上 (二), 地理学評論, 第3巻5号, p.382-396.

Summary

The Ohmichidani district, one part of Shiramine-mura, had once a good deal of population before the Second World War. Even after the war, many people lived there until the beginning of the "Fuel Revolution (the change of the energy resources for daily life from charcoal and firewood to propane gas and kerosene)" during the 1960's.

The ex-habitants of Ohmichidani went mainly to the center area of Shimamine-mura and Fukui pref., especially Katsuyama. The reason why they went to Katsuyama was mainly due to a long and dense interrelation by marriage and removal between both people of Ohmichidani and Katsuyama. That migration shows there may have been opposite removals from Katsuyama to Ohmichidani before Meiji Era. The removal may be an origin of so-called "Dezukuri" in the southern part of Shiramine-mura.

In addition to the direction of removal, there was a psychological feature on their removals that people didn't have much persistence in the land and its possession. That is one factor of frequent removal around Ohmichidani.

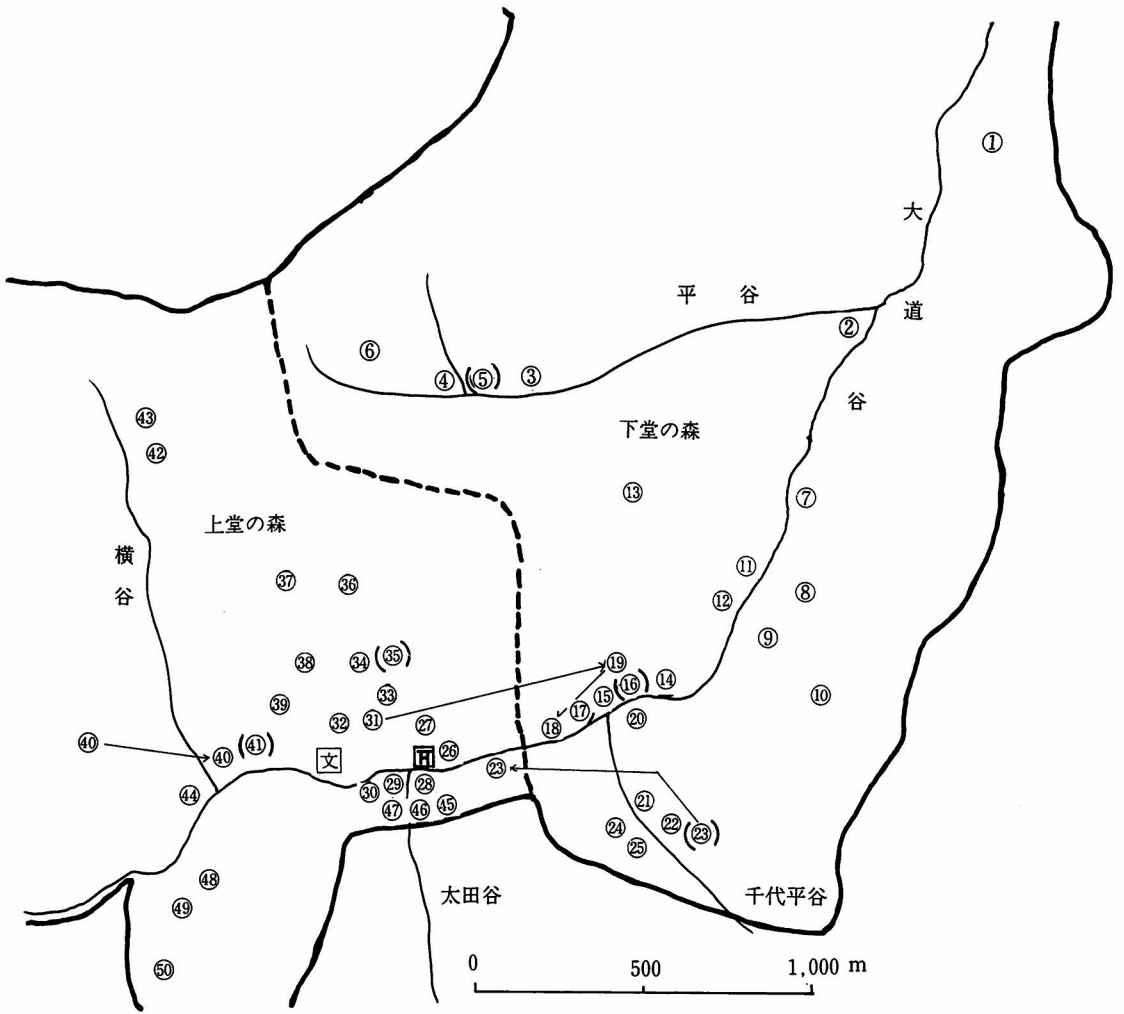


図2 堂の森の作り分布

表2 堂の森の居住者 (1~25:下堂の森、26~50:上堂の森)

(×:家が絶えた)

(○:居住した)

屋号	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	昭和30年	備考
1	イチロウザエモン	季節出作	?				冬期は白峰本村。ミツ(→大坂)の後へ入った。
2	シンゴロウ	季節出作	外国へ移住				冬期は白峰本村にいた。
3	ゲン	季節出作	勝山				冬期は白峰本村にいた。
4	コザキチ	永住	自作 村	5(アサギ)	670		
5	フクサブロウ	季節出作	4→村			○	冬期は白峰本村にいた。
6	ヨソイワサブロウ	永住	請作 ×				
7	ニサハチ	季節出作	自作 村→大坂				

岩田：白峰村大道谷地区における出作り分布の変遷について

8	ツギマツ	季節出作	自作	大坂				
9	シロヘイ	季節出作	自作	村			○	冬期は白峰本村にいた。
10	シチザイモ	永住	請作	河内谷→村				
11	ヘイノジョウキクジョ	永住	自作	?				19(ノノシヤ)の娘
12	キュウザイモ	永住	?	勝山				27(リノサ)の息子。
13	ギョウシ	永住	自作	勝山		710		
14	イサプロウ	永住	自作	勝山		550	○	
15	ナンモ	永住	自作	勝山(北谷)	18(イッサプロウ)	570		
16	イッサプロウ	永住	自作	勝山			○	
17	セイスケ	永住	自作	勝山		570	○	
18	スエキチ	永住	自作	勝山	19(ノノシヤ)	570	○	
19	ヘイノジョウ	永住	自作	18→勝山			○	
20	イワマツ	永住	請作	×		560		太田谷(21)から移った。ここで家系が絶えた。
21	リサプロ	永住	自作	村		560	○	
22	サプロウザエモン	永住	?	?	23(ジヤ)			
23	リサ	永住	請作	23'→金沢		580(23')	○(23')	今も夏期には(23')で出作り。冬期は金沢。
24	サンダヨ	永住	請作	×				
25	サンダヨオジ	永住	請作	勝山				
26	ジンノ	永住	請作	村		580	○	夏期は菊安谷(11)へ出作りになっていた。
27	リノキチ	永住	自作	松任		580	○	大正初期に太田谷(9)から移った。
28	シヨモ	永住	請作	現在も居住		570	○	
29	オオキタ	永住	請作	勝山		580	○	
30	ヘイロク	永住	請作	現在も居住		580		昭和20年代には、太田谷(19)にいた。
31	ヘイノジョウ(フルヤマ)	永住	?	19へ				
32	フク	永住	?	?				
33	ヒコダヨ	永住	請作	太田谷→勝山				太田谷(6)の後、勝山へ移った。
34	イシマツ	永住	請作	福井県	35(ササモ)			
35	キタヨモ	永住	請作	34へ(×)			○	
36	サプロウ	永住	請作	勝山				
37	フクゾウ	永住	請作	勝山				
38	ジュウロモシロベ	永住	請作	小松				
39	シロハチ	永住	請作	勝山				
40	アラヤシロベ	永住	自作	村	41(ヨシコナカ)	580	○	
41	ゴザヨシナカ	永住	自作	現在も居住				五十谷(8)より移った。
42	キザイモ	季節出作	請作	村→金沢				冬期は風嵐にいた。
43	シンザイモ	季節出作	請作	鶴来				冬期は風嵐にいた。
44	ヨソイワコサ	永住	請作	福井県(武生)				
45	キヘイ	永住	請作	勝山		660	○	今も夏期には(45)で出作り。冬期は勝山。
46	シンロクトメ	永住	自作	金沢				
47	ヨソイワ	永住	自作	勝山		590	○	今も夏期には(47)で出作り。冬期は勝山。
48	サキチ	永住	自作	福井県(森田)				
49	センジロウ	永住	請作	福井県(?)				
50	サンニョモン(コヤノ)	永住	請作	五十谷→菊安谷				菊安谷で家系が絶えた。

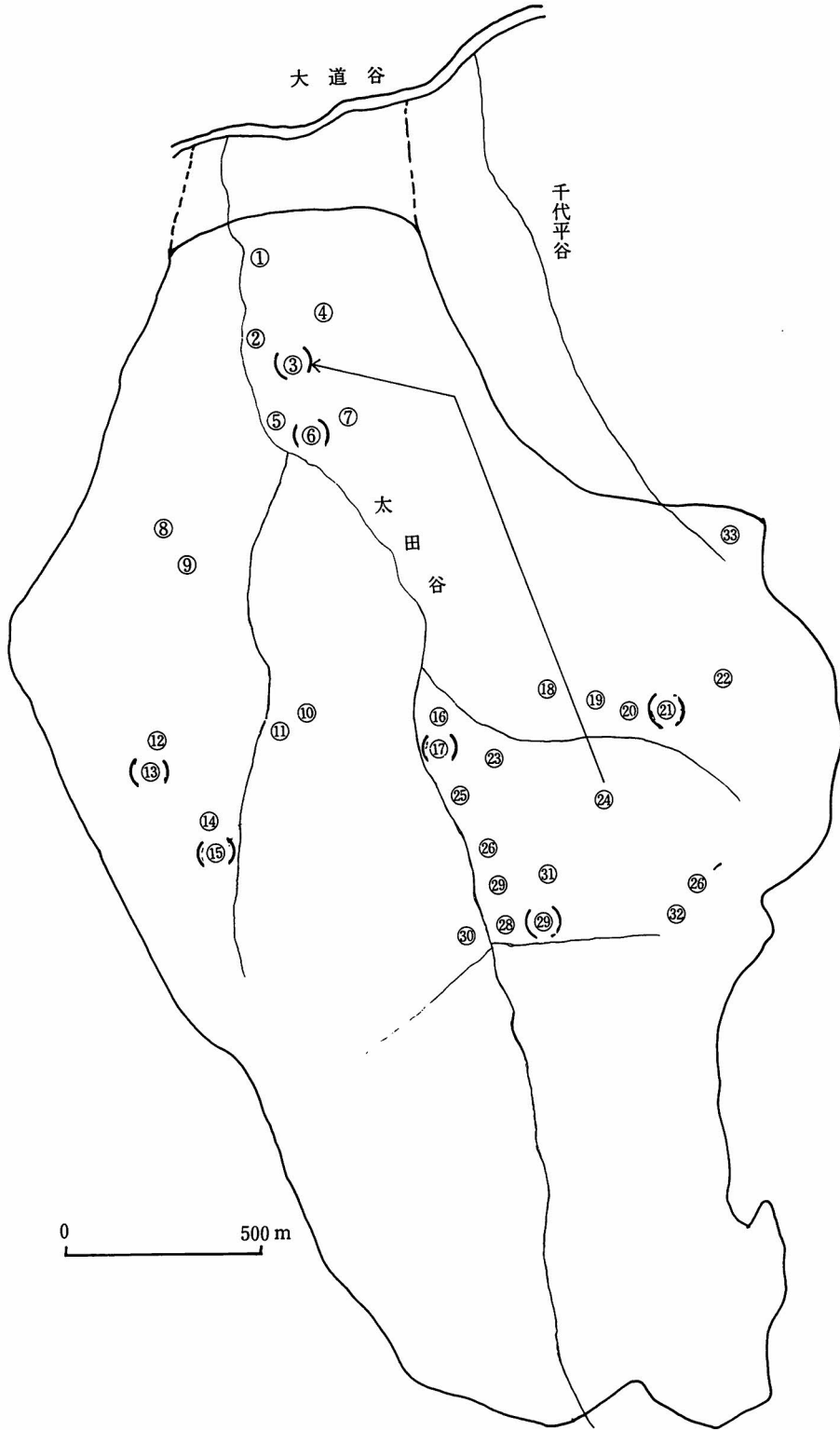


図3 太田谷の出作り分布



岩田：白峰村大道谷地区における出作り分布の変遷について

表3 太田谷の居住者

(×:家が絶えた)

(○:居住した)

	屋号	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	S30年頃	備考
1	コシロウ	永住	請作	勝山		610		
2	ヨソマツ	永住	自作	勝山	3(ヒツ)			
3	セイゾウ	永住	自作	村				(24)から移った。
4	オトシ	永住	自作	勝山		660	○	
5	ヤチヨ	永住	自作	勝山(×)	6(ヒツ)			
6	ヒコダヨ	永住	自作	5→勝山			○	堂の森(23)から移った。
7	チュウヨモ	永住	自作	勝山		670	○	
8	シンロクトメ	永住	自作	堂の森(46)→金沢		760	○	
9	キヘイ	永住	請作	堂の森(45)→勝山		660	○	前はヒツ(堂の森27)
10	イチロモシロベ	季節出作	自作	村		800	○	冬期は白峰本村にいた。
11	キノスケ	永住	請作	勝山				冬の間は(10)の小屋番をしていた。
12	チュウザブロウ	永住	請作	大阪	13(ヒツ)			
13	キヘエキサク	永住	請作	12→勝山				
14	キザイモキヘエ	永住	請作	×	15(ヒツ)			(15)に山を借りていた。
15	ヤンチロウ	永住	自作	14→村				
16	ノオ	永住	自作	村	17(ヤウ)	750		
17	タロウコサ	永住	自作	16→村			○	
18	キチゾ	永住	自作	能登				
19	マンジ	季節出作	自作	村				冬期は白峰本村にいた。戦後ヒツ(堂の森30)へ。
20	アラヤコサ	永住	自作	金沢	21(ヒツ)			
21	イワマツ	永住	請作	堂の森(20)→×				堂の森(20)で死に絶えた。
22	キヨタツ	永住	請作	福井県				
23	フクマツ	永住	請作	×				
24	セイゾウ	永住	自作	3→村			○	19(マンジ)の分家。
25	ゴダヨ	永住	自作	勝山				
26	マツクラ	永住	請作	能登				26'は麗居場。
27	チュウクロウ	永住	請作	×				
28	イシマ	永住	請作	勝山	29(ヤウ)			
29	ロクベエ	永住	自作	×				
30	イッサブロウ	季節出作	請作	堂の森(16)→金沢				
31	スケジロ	永住	自作	×				
32	サンタ	永住	請作	村(風嵐)				
33	ユウヨモ	永住	自作	村				

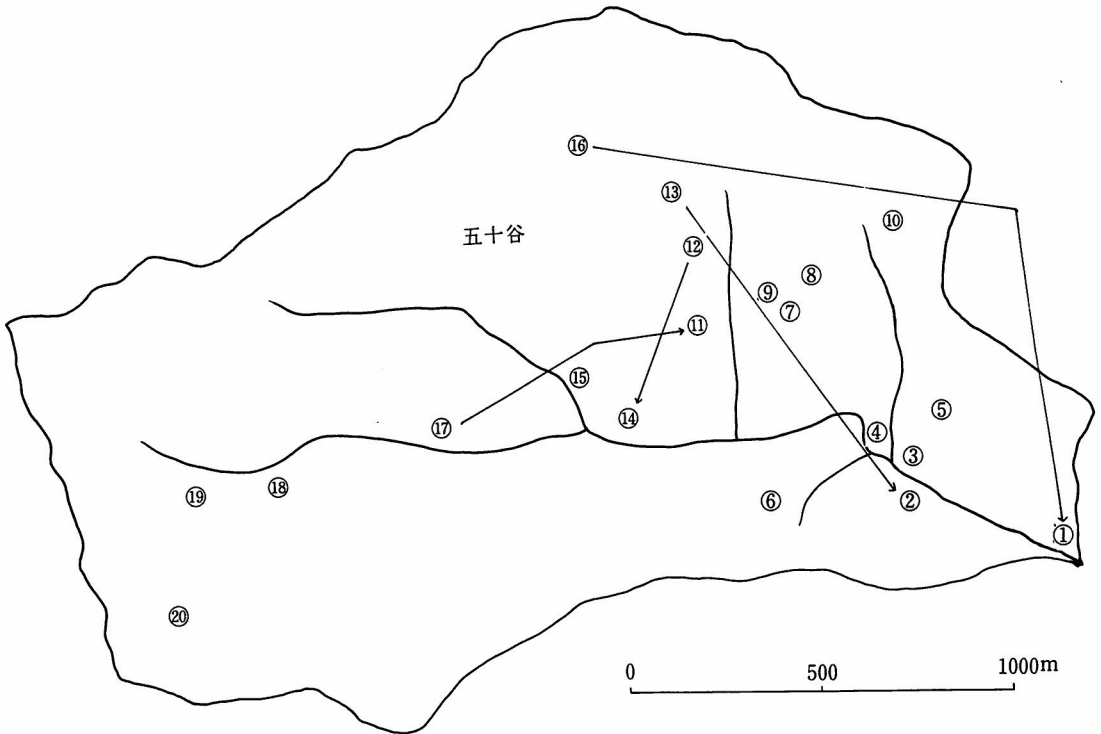


図4 五十谷の作り分布

表4 五十谷の居住者

(×:家が絶えた)

(○:居住した)

屋号	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	S30年頃	備考
1 センニョモン	永住	請作	村		640		
2 シロザエモン	永住	自作	村→金沢	13(トメ)	680		
3 コシロスエ	永住	請作	勝山				
4 シチ	永住	請作	大阪		695	○	
5 サンニョモン (コヤノ)	永住	請作	苅安谷 (2, ×)				堂の森 (41) → 五十谷 (5) → 苅安谷 (2) と移動
6 チュー	永住	自作	村		780	○	
7 ゴザ	永住	自作	大阪		840	○	
8 ゴザヨシナカ	永住	請作	堂の森 (35)			○	昭和10年代に (7) から分家。
9 チュウヨモンゲンベ	永住	請作	勝山				
10 ゴザイワ	永住	請作	勝山				
11 スケザエモン	永住	自作	×	17(ウケイ)			
12 ショウタ	永住	自作	14→堂の森→村			○	
13 トメ	永住	請作	2→村			○(2)	
14 ヨシベエ	永住	自作	勝山	12(ウケイ)			
15 ヘインチ	永住	自作	大阪		780	○	
16 センニョモン (コヤノ)	永住	請作	1→村			○	
17 ロクイワ	永住	請作	11→勝山				
18 ヘイヨモンシロ	永住	請作	勝山				
19 コイシ (コヤノ)	永住	請作	?				
20 セイハチ (コヤノ)	永住	請作	北海道				

岩田：白峰村大道谷地区における出作り分布の変遷について

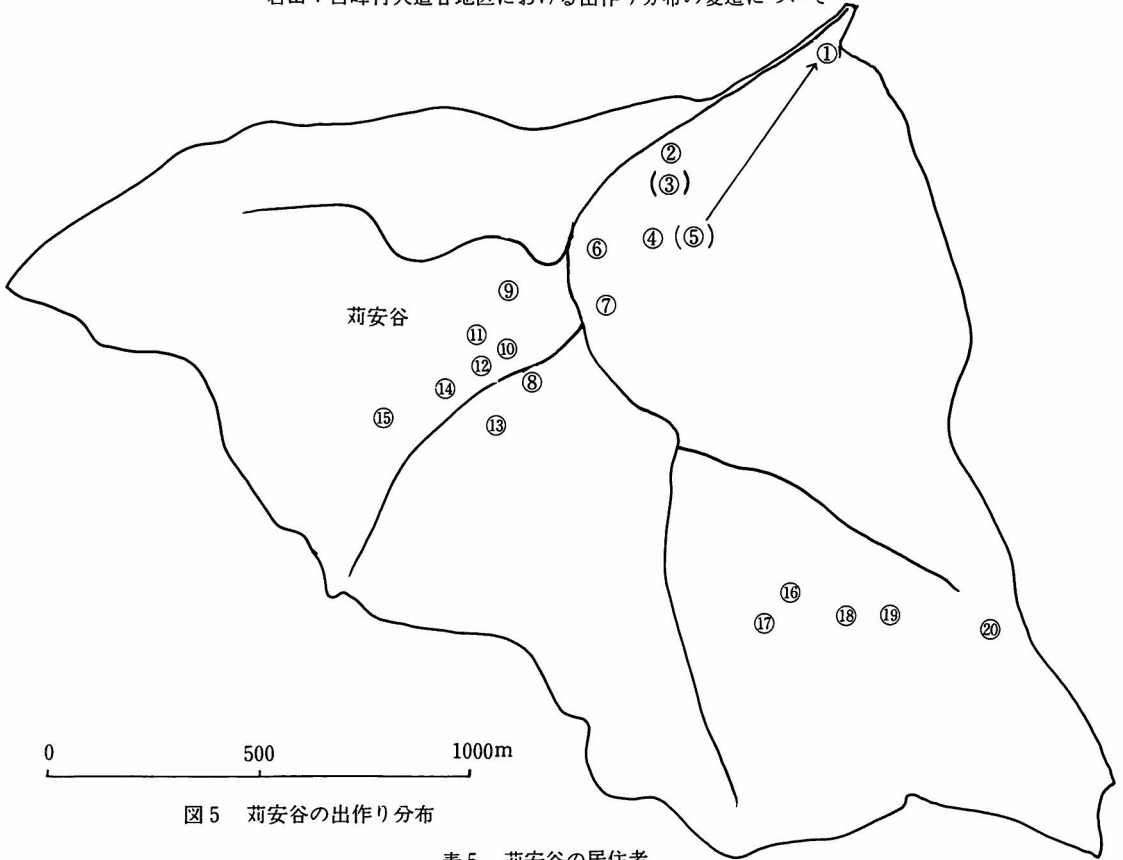


図5 荻安谷の出作り分布

表5 荻安谷の居住者

(×: 家が絶えた)

(○: 居住した)

屋号	居住形態	土地所有	転出先	後の居住者	標高	S30年頃	備考
1	永住	自作	福井泉	5(トウベ)	640		
2	永住	自作	勝山	3(サニョモン)	655		
3	永住	自作	2 (×)				堂の森(41)→五十谷(5)→荻安谷(3)と移動
4	永住	請作	金沢	5(トウベ)			
5	永住	自作	(4)→(1)→勝山				
6	永住	自作	勝山				
7	永住	自作	勝山				前はマゴスケ(→北海道)がいた。
8	永住	?					
9	永住	請作	勝山				
10	永住	自作	勝山				
11	永住	請作	勝山	ジンノ		○(ソウ)	ジンノ(堂の森26)が夏期出作りにきていた。
12	永住	?					
13	永住	請作	加賀市				
14	永住	?					
15	永住	自作	村				
16	季節出作	自作	村		850	○	冬期は白峰本村にいた。
17	永住	自作	堂の森(22)		850	○	
18	永住	請作	×				
19	永住	請作	? (×)				
20	永住	自作	勝山				